

## 『O侯爵夫人』に関する一考察

—認識の一面性とグロテスクをめぐって—

南 勉

## 序

詩人が当該作品に着想したのは、1805—06年頃であり、作品の完成は、1807年、詩人がフランスで監禁されていた時のことである。彼は、当初この作品を単行本で上梓するつもりであったが、ミュラーの要請に従い『フェーブス』に掲載した。

世界文学において、女性が熟睡している間や失神中に懐胎するというモチーフは、決して少なくない。詩人が当該作品を執筆する契機となった素材は、モンテーニュの „Essai über die Trunksucht“ 中の次のような逸話である。<sup>(1)</sup> ボルドーの近傍に貞淑のほまれ高い未亡人の農婦が住んでいた。彼女は、懐胎の兆しを感じた時、もし自分に夫があれば自分は懐胎していると信じられるのだが、と隣人に告白した。しかし彼女の疑念は日ごとに募り、懐胎の事実は秘匿し難くなったので、彼女は説教壇から、「このような行為に出た男は名乗り出て欲しい。自分はその者の罪を許し、その者さえよかったら結婚するつもりでいる」と告知させることを決意した。彼女の屋敷の下男は、この告知に勇気づけられ、「自分は、祝祭の時彼女がしたたか飲酒した後、彼女が炉端で熟睡しているのに気がつき、誠に不作法なやり方で、彼女に気づかれずに機会を利用することができた」と説明した。二人は、今でもともに仲よく暮している。<sup>(2)</sup> この逸話は、実に素朴ですがすがすがしい印象を与える。ここで次にO侯爵夫人の新聞記事を見てみよう。「自分は、身におぼえなくして懐胎した。やがて生まれる子供の父親は、名乗り出て欲しい。自分は、家族に対する配慮から《aus Familienrücksichten》その人と結婚するつもりである」。<sup>(3)</sup> この記事は、そこはかたなく人を緊張させる。この相違は、果してどこにあるのであろう

(1) H. v. Kleist : SÄMTLICHE WERKE UND BRIEFE (以下 Werke と略記) 2, C. Hanser Verlag München 1977. S. 899

(2) *ibid.*, S. 899—900

(3) *ibid.*, S. 104

か。二人の女性の共通点と相違点を抽出してみよう。共通点は、身におぼえなき懐胎と告知だけである。二人の相違点は、第一に前者は農婦であるのに対し、後者は貴族であるということ、第二に懐胎後の結婚が、前者の場合相手の意志を前提にしているのに対し、後者の場合《家族への配慮》を前提にしていること、第三にこのような懐胎が起きた状況が、前者の場合祝祭後であるのに対し、後者の場合戦争中であるということ、である。この三つの相違点を比較検討すると、どうして受ける印象が異なるかが判然としてくる。前者の場合には、全てが自然に起きており、後者の場合何かある基準に基いて起きている。ここには明らかに、個人としての行動・判断と非個人としての行動・判断との相違がある。この相違の中に、当該作品の独自の世界が暗示されている。〈貴族階級〉、〈家族への配慮〉、〈戦争〉、この三つの要素の中に、当該作品を解釈するための重要な糸口が秘められているように思われる。従って筆者は、当該小論において、身におぼえなき懐胎の原因について考察し、二人の主人公の行動と発想を分析し、更に個対貴族意識の対立と個の敗北、それに起因する生のグロテスクな有りようを浮き彫りにしてみたい。

## I

序に述べたO侯爵夫人のいささかスカンダラスな記事が新聞に出た唯一の理由は、彼女の身におぼえない突然の懐胎である。この事実にも最も深いかわりをもつ人物は、ロシア軍の将校にして伯爵である。ここではこの伯爵について考察してみよう。

彼は、F伯爵としか叙述されていない。ロシア軍は、強力な軍隊であり、彼はその軍隊の象徴的存在である。彼は、一点にとどまることなく戦火の海を何処へも赴く行動的な人間である。彼のすみかは、戦火の海であり、四囲を海で囲まれ隔絶された島では決してない。O侯爵夫人との邂逅の舞台も戦場である。軍人のF伯爵にとって戦争は、生の方向を決定づける。戦争は、他方で人間の精神を極限状況へ貶しめ、かかる状況のもとでは何が起きるか予測だにできない。そして女性は、その際彼女のもつ本来的役割を發揮する機会を喪失し、悲劇的体験を余儀なくされる。O侯爵夫人も、決してその例外ではない。彼女は、戦火の中で戸惑い行くべき道を見失っている時にロシア軍の兵士たちに捕えられ、凌辱を受けんとする。その時ロシア軍の将校F伯があらわれ、彼女を力づくで救出し、安全な場所へと避難させる。

Hier—traf er, da bald darauf ihre erschrockenen Frauen erschienen, Anstalten, einen Arzt zu rufen; versicherte, indem er sich den Hut aufsetzte, daß sie sich bald erholen würde; und kehrte in den Kampf zurück. <sup>(4)</sup>

この引用中のゲタンケンシュトリッヒ<—>には注目すべきである。これこそが、身におぼえなき懐胎の謎を解明する手がかりである。<sup>(5)</sup> このゲタンケンシュトリッヒは、具体的には一定の時間的経過を示唆している。具体的に叙述されてはいないが、この一定の時間内にしかるべき出来事が起きている。と言うのは、引用文の内容に矛盾があるからである。彼は、一方で「医者を呼ぶ準備をしつつ」、他方で「帽子をかぶりO侯爵夫人は回復する」と断言している。彼女は、決して病気ではない。それ故に、「何故医者を呼ぶ準備をしなければならないのか」、また当然かぶっていたはずの帽子を「何故かぶる」必要があるのかと問いたくなる。<sup>(6)</sup> 更にまた、「医者を呼ぶ準備をしつつ」どうして「彼女は回復する」と断言できるのだろうか。これらの疑問は、言外の示唆によってしか解明されえない。つまり、しかるべき出来事が確実に起きているのである。

F伯爵は、戦火の混乱の中で明らかに理性を失っている。戦争の混乱は、この事実によって彼の行動の方向を決定づける。彼は、将軍の登場によって理性をとりもどし、自分の英雄的果敢な行動を賞賛されて、「顔一面を朱に染め」<sup>(7)</sup> てしまう。彼は、その後夫人に凌辱を加えた兵士たちの名を言うように命じられて当惑する。将軍は、調査の後夫人に凌辱を加えた兵士たちを処刑する。この処刑は、F伯爵にとって大きな意味を持つ。罪があるのはむしろ彼の方であり、兵士たちは無関係である。それにも拘らず、兵士たちは処刑され、彼は彼等の弁護どころか、自分の犯した罪の告白さえできない。この事実は、一方で彼の心の傷になり、他方で貴族階級の強いヒエラルヒーを示唆している。彼は、O侯爵夫人の面会要請に対して一度は応じながらも、「事情が事情なので残念ながらよろしくお伝え下さい」<sup>(8)</sup> と述べるにとどめ、彼女に会おうとしない。

(4) *ibid.*, S. 106

(5) R. Dürst: HEINRICH VON KLEIST—Dichter zwischen Ursprung und Endzeit, FRANCKE VERLAG BERN UND MÜNCHEN 1977, S. 112

(6) B. Beckmann: Kleists Bewusstseinskritik—Eine Untersuchung der Erzählformen seiner Novellen, PETER LANG Bern, Frankfurt am Main, Las Vegas 1978, S. 68

(7) Werke, a. a. O., S. 107

(8) *ibid.*, S. 108

これはひとえに、彼の心が兵士たちの処刑に起因する恥辱の念に支配されているからである。更に彼は、新たな戦場で瀕死の傷を負った時、「ユリエッタ！この弾丸が君の仇を討つのだ。」<sup>(9)</sup>と述べている。ここに謂う〈ユリエッタ〉なる人物は、O侯爵夫人以外の誰でもない。引用(4)のゲタンケンシュトリッヒの意味は、ここでもはっきりしている。F伯爵は、明らかに罪の意識によって内面を強く支配されている。<sup>(10)</sup>彼の行動は、この出来事によって全面的に方向規定される。つまり自分の犯した罪を贖うことが、彼の一貫した行動になってゆく。

--- ; daß währenddessen die Frau Marquise sein einziger Gedanke gewesen wäre ; daß er die Lust und den Schmerz nicht beschreiben könnte, die sich in dieser Vorstellung umarmt hätten ; daß er endlich, nach seiner Wiederherstellung, wieder zur Armee gegangen wäre ; …… daß er mehrere Male die Feder gegriffen, um in einem Briefe, an den Herrn Obristen und die Frau Marquise, seinem Herzen Luft zu machen ; -- --<sup>(11)</sup>

この引用の最後の2～3行には注目すべきである。ここにも明らかに、彼の「犯してしまった罪に対する絶望と、その罪を贖おうとする」願望が行間に秘められている。この願望によって彼の行動は、烈しさを増してゆく。

F伯爵の行動を規定する他の要因は、彼の貴族としての身分と立場である。この要因は、当該作品において極めて重要な役割を果している。

; daß die einzige nichtswürdige Handlung, die er in seinem Leben begangen hätte, der Welt unbekannt, und er schon im Begriff sei, sie wieder gut zu machen ; daß er, mit einem Wort, ein ehrlicher Mann sei, und die Versicherung anzunehmen bitte, daß diese Versicherung wahrhaftig sei. <sup>(12)</sup>

この引用を二つに分けて分析してみよう。まずここで謂う「自分がこの方犯してしまった唯一の卑劣な行為」とは、何であろうか。これは、明らかに作品

(9) *ibid.*, S. 108

(10) J. Kunz: Die deutsche Novelle zwischen Klassik und Romantik Erich Schmidt Verlag, Berlin 1971. S. 137

(11) Werke, a. a. O., S. 110–111

(12) *ibid.*, S. 112

の冒頭で起きた「しかるべき出来事」以外の何事でもない。彼は、ここで具体的表現を避けている。これは、明らかに貴族の慣習である。この「卑劣な行為が世間に知られていない」ということは、どのような意味を包含しているだろうか。それは、引用の後半部と深くかかわっている。彼は、「自分は立派な人間である」と断言し、かつその断言を受け入れるように要請している。彼は、何故このような断言をしたのであろうか。また前半部では具体的表現を避けながら、ここではどのような根拠に基いて具体的な断言ができたのであろうか。卑劣な行為を犯した人間は、決して立派な人間ではない。ここには、明らかに論理的な矛盾がある。彼自身、この矛盾に気付いていない。彼は、自分の卑劣な行為は世間に知られていない、だから贖う余地がある、自分はその行為を贖うべく尽力している、よって自分は立派な人間である、と理解している。彼は、それ故自分の犯した罪は求愛行為によって完全に償われると考えている。<sup>(13)</sup> 彼は、明らかに個人としてではなく、貴族階級の一構成員として発想している。従って彼の求愛行為の中で、„Liebe“が大きな役割を果たしているとは決して言えないのである。彼は、終始この発想に支配され、彼の行動の方向に変化はない。

--- : wie er die Vorstellung von ihr, in der Hitze des Wundfiebers, immer mit der Vorstellung eines Schwans verwechselt hätte, den er, als Knabe, auf seines Onkels Gütern gesehen; daß ihm besonders eine Erinnerung rührend gewesen wäre, da er diesen Schwan einst mit Kot beworfen, worauf dieser still untergetaucht, und rein aus der Flut wieder emporgekommen sei; daß sie immer auf feurigen Fluten umhergeschwommen wäre, und er Thinka gerufen hätte, welches der Name jenes Schwans gewesen, daß er aber nicht im Stande gewesen wäre, sie an sich zu locken, indem sie ihre Freude gehabt hätte, bloß am Rudern und In-die-Brust-sich-Werfen; ---<sup>(14)</sup>

「傷の熱」は、人間の五感の把握能力を超えた何かを示唆し、「白鳥」は清浄の象徴であり、「燃えるような水」は、魂の領域である。<sup>(15)</sup> 火とは生命であ

(13) J. Kunz, a. a. O., S. 138

(14) Werke, a. a. O., S. 116

(15) R. Dürst, a. a. O., S. 114

り、生命とはプロメテウスの炎である。<sup>(16)</sup> F伯爵は、O侯爵夫人を白鳥にたとえている。彼女は、罪の意識に支配されている彼の目には、清浄な存在として映ることは言うに及ばない。「白鳥に泥を投げつけた」行為は、くしかるべき行為を暗示している。そして「名を呼んでも白鳥を招き寄せることができない」という表現は、彼の現実の苦況をほのかに示唆している。彼は、このように事の本質を暗示するだけであり、決して具体的に述べはしない。O侯爵夫人も、彼女の両親も、このような極めて控え目な表現を、事の本質を知らないが故に、全く理解できないのである。彼は、貴族の慣習に強く支配され、矛盾を看過し、個人としてではなく一構成員として行動している。彼の憤りの行動は、決して他人への配慮に依拠するものではない。原素材の下男との相違は、ここにある。彼の行動は、確かに一貫してはいるけれども、„Liebe“とはおよそ無縁である。従って彼の彼女への求愛行為に関する発言には、空しい響きが漂っている。彼は、この意味において極めてグロテスクな存在であると言うことができる。

## II

ここでは、O侯爵夫人について考察を進めてみよう。彼女は、未亡人である。彼女の住んでいる世界は、隔絶された孤島のように狭い。彼女は、狭い世界、貴族、未亡人という制約のために、認識の一面性に陥っている。そしてその一面性は、父とのかかわりによって決定的になっている。ここでは、前半と後半にわけて彼女の認識の一面性と変化について考察してみよう。

第一番目は、父との共同生活である。彼女は、夫を失って以来父と同居している。この世界は、秩序ある世界である。

Auf Frau von G...s, ihrer würdigen Mutter, Wunsch, hatte sie, nach seinem Tode, den Landsitz verlassen, den sie bisher bei V... bewohnt hatte, und war, mit ihren Kindern, in das Kommandantenhaus, zu ihrem Vater, zurückgekehrt. Hier hatte sie die nächsten Jahre, mit Kunst, Lektüre, mit Erziehung, und ihrer Eltern Pflege beschäftigt in der größten Eingezogenheit zugebracht: ---(17)

(16) *ibid.*, S. 114

(17) *Werke*, a. a. O., S. 104

彼女は数年間、芸術や読書、子供の教育と両親の世話に携わりつつ、数年をすごしている。芸術と読書は、秩序ある世界を示唆している。しかも「ことさらひっそり引きこもっている」のだから、この世界は、それ事体完結した牧歌的世界であるように思われる。ひきこもった生活は、現実から離れているために、必然的に現実感覚を喪失せしめる。ここで引用文の文体に注目してみよう。文章は、全て過去完了で書かれている。このことは、秩序ある世界が、彼女にとってすでに過去のものであるということの意味している。やがて戦争が勃発し、現実感覚の欠如した彼女は、新しい現実の局面に対し「どちらへ進んでいいのか」<sup>(18)</sup> わからない。彼女はまた、ロシア軍の兵士たちをある時には「狙撃兵」と思ったり、またある時には「暴徒」と思ったりしたりしている。<sup>(19)</sup> 彼女の意識は、新しい局面において著しく混乱している。この局面において、彼女にとって二種類の間人しか存在しない。その一者は、彼女を庇護してくれる人間であり、他者は、彼女に攻撃を加える人間である。具体的には、前者は父親であり、後者はロシア軍の兵士たちである。彼女の意識は、この二つのタイプによって規定されている。

Man schleppte sie in den hinteren Schloßhof, wo sie eben, unter den schändlichsten Mißhandlungen, zu Boden sinken wollte, als, von dem Zetergeschrei der Dame herbeigerufen, ein russischer Offizier erschien, und die Hunde, die nach solchem Raub lüstern waren, mit wütenden Hieben zerstreute. Der Marquise schien er ein Engel des Himmels zu sein.<sup>(20)</sup>

彼女は、ロシア軍の将校が自分を救出してくれたがために、彼のことを<天使>のように理解している。彼女の目にはそのように映るかも知れないが、原文には「天使であるかのように思われた」と叙述されている。この「かのように」が重要である。彼は、実際には人間であり、決して天使ではない。彼女は、彼が自分を救出してくれたという一点からのみ判断を下し、彼の中に天使を見ている。つまり彼女は、「人間の現実を誤解している」<sup>(21)</sup>のである。ここ

(18) *ibid.*, S. 105

(19) *ibid.*, S. 105

(20) *ibid.*, S. 105

(21) W. Müller-Seidel: VERSEHEN UND ERKENNEN—Eine Studie über Heinrich von Kleist BÖHLAU VERLAG KÖLN UND MÜNCHEN 1971. S. 126

には彼女の認識の一面性が、明々白々と表出している。彼女はこのような理由から、彼が犯した卑劣な行為に気付かない。彼女は、意識を回復した後「自分の救出者に対して謝意を表明すべく起きあがること以外の望みを持っていない」<sup>(22)</sup>と断言する。更に彼女は、彼の不確かな訃報に接して深く悲しみ、「自分が彼の足下にひざまずく機会を逸したことを」<sup>(23)</sup>後悔する。そして彼の所謂最後の言葉「ユリエッタ！この弾丸が君の仇を討つのだ」を聞いた時、彼女は、このユリエッタなる人物が自分のことだとはゆめゆめ思わず、「彼が今はの際に考えていた、自分と同名の不幸な女性のことを気の毒に思い、この不幸な事件を知らせるために、空しくその女性の居所を捜した」<sup>(24)</sup>のである。彼女のこのような一連の行動は、好意の域をはるかに超え、いささか奇矯な印象を与える。それは、第一に彼女が認識の一面性に陥っているからであり、第二に未亡人であり、今の不自然な生活に不安を感じているからである。F伯爵との再会後も、事情は決して異ならない。彼女は、伯爵のことをどのように思っているのかとの質問に対して、「好きだとも思うし、また好きでないとも思う」<sup>(25)</sup>と答え、他人の印象を引き合いに出している。「好きだとも思うし、また好きでないとも思う」という表現は、微妙な表現である。この表現は、「伯爵の矛盾に満ちた性格を示唆」<sup>(26)</sup>している。彼女を救出した伯爵と、彼女に激しく執拗に求愛する伯爵とは、彼女にとって別人のように見えるからである。他方この表現は、彼女の個人としての抑圧された感情をほのかに暗示している。彼女は、一貫して再婚を拒否してきた。従って、突然自分の見解を変えるわけにはゆかない。しかし抑圧された感情はおさまらない。彼女は、家族の慣習から、個人としてではなく、一構成員として発想している。それ故彼女の発言は、極めて微妙である。

In diesem Fall, versetzte die Marquise, würd ich — da in der Tat seine Wünsche so lebhaft scheinen, diese Wünsche — sie

(22) Werke, a. a. O., S. 106

(23) *ibid.*, S. 108

(24) *ibid.*, S. 108

(25) *ibid.*, S. 117

(26) W. Müller-Seidel: Die Struktur des Widerspruchs in Kleists „Marquise von O . . .“ in WEGE DER FORSCHUNG HEINRICH VON KLEIST. WISSENSCHAFTLICHE BUCHGESELLSCHAFT DARMSTADT 1980 (以下 W. G. と略記) S. 255



stockte, und ihre Augen glänzten, indem sie dies sagte—um der Verbindlichkeit willen, die ich ihm schuldig bin, erfüllen. <sup>(27)</sup>

彼女は、母の質問に答えて「自分が受けた恩義のために」伯爵の強い願望を叶えてやることになると言っているが、表現こそ控え目なもの、ここには分裂のない彼女の本意が表白されている。この表現からわかるように、彼女はまだ、事実を認識していない。父との同居生活は、彼女にとって認識の一面性と受動的安逸な生を容認する場である。

さて第二番目は、父との別居生活である。その原因は、彼女の身におぼえなき懐胎である。彼女は、しかるべき事が起きた時失神していたために、何故自分が身ごもったのか理解できない。意識の上では純粋でありながら、体は意識とは異った反応を示す。ここには論理は成立しえない。„Ein reines Bewußtsein und eine Hebamme“<sup>(28)</sup> という母の指摘は、この事実を的確に把えている。慣習の中には、「徳と純粋な意識とがある」が、「それらは論証されねばならない」<sup>(29)</sup> のである。彼女は、その「徳と純粋な意識」を論証できないがために、窮境へ追いやられる。母は、彼女を出産した時を呪い、実家での産褥の床を許さない。父は、ピストルを発砲して彼女を威嚇し、加えて彼女から子供まで取りあげようとする。その理由は、不義の懐胎が貴族の慣習に悖るからである。父との別居生活は、彼女の母性感情を強力にし、彼女を積極的人間へと変化せしめる。彼女は、運命の奈落から独力で立ち上がった時、大きな満足をかみしめ、「彼女の思慮分別は、この奇異な状況の中でもなお抜き難いまでに強かったが、大いなる神聖にして不可思議な摂理の前に屈服した」<sup>(30)</sup> のである。彼女は、両親に自分の純潔を納得させる努力を断念し、「自己の内奥に引きこもり、二人の子供の教育に全力をあげて専心」<sup>(31)</sup> し、やがて生まれる第三番目の子供を〈母親の愛情〉で育てようと決意する。彼女は、母性感情から積極的になり、この限りにおいて一貫している。

Nur der Gedanke war ihr unerträglich, daß dem jungen Wesen, das sie in der größten Unschuld und Reinheit empfangen hatte, und dessen Ursprung, eben weil er geheimnisvoller war, auch göttlicher

(27) Werke, a. a. O., S. 117

(28) *ibid.*, S. 112

(29) W. Müller-Seidel, W. G., a. a. O., S. 250

(30) Werke, a. a. O., S. 126

(31) *ibid.*, S. 126

zu sein schien, als der anderer Menschen, ein Schandfleck in der bürgerlichen Gesellschaft ankleben sollte. <sup>(32)</sup>

彼女は、「無上の無垢と純潔のうちに身ごもった」子供に、社会で「罪の烙印が押される」のではという不安に強く苛まされている。その理由は、「子供の由緒が、他人の由緒よりも神秘的であり、かつ神々しく思われる」からである。彼女はここで、自分と子供の間には一切問題はなくとも、子供と社会の間にはおおよそ克服し難いまでの矛盾が存在することを、はっきりと認識している。それ故彼女は、子供に関して新たな、諦念にも似た認識へと到達する。

--- und sie bedachte, daß der Stein seinen Wert behält, er mag auch eingefaßt sein, wie man wolle, --- <sup>(33)</sup>

この引用は、極めて難解であるが、決して看過できない。引用中の〈石〉とは、子供のことである。〈石〉がはめこまれる場合は、貴族社会である。彼女は、自分の子供がどんな運命を辿ろうとも、子供の価値は変わらないと考えている。この認識は、忍び難い印象を与える。彼女は、〈母—子〉という牧歌的な世界においては矛盾を克服している

しかしこの牧歌的世界に沈涵することによって、果して矛盾が解決されうるだろうか。彼女は、確かに〈母—子〉の関係において貴族の慣習を超越しているかのように見えるけれども、果してそうであろうか。結論から言うと否である。この段階の彼女にとって二種類の生き方が考えられる。第一の生き方は、貴族の慣習を完全に超越し、孤立無縁に自己の世界に没我する生き方である。このようにして生きる時、子供と社会の間に存在する矛盾は、彼女にとって大した意味をなさない。彼女はこの場合、完全な個人として生きていることになる。第二の生き方は、貴族の慣習に従い、それに合致する世界を構築する生き方である。後者を選択すると、意識の俎上に先述した矛盾が大きく上ってくる。従って彼女はこの場合、名状し難い屈辱と辛苦を甘受せざるをえない。彼女は、結果的に後者を選択している。彼女の選択には、次のような意味が秘められている。つまりそれは、第一に彼女は自立した個人ではなく、またかくあるこうとする努力を放棄したということであり、第二に貴族の慣習を容認することによって、それに対して完全な敗北を喫しているということである。そしてそれは更に、彼女が貴族の一員として、幸福を希求していることでもある。彼

(32) *ibid.*, S. 126–127

(33) *ibid.*, S. 127

女は、しかしながらこのような選択の意味に気付いていない。従って彼女は、牧歌的世界に完全には没我できないために、現実の矛盾に直面せざるをえない。ここで謂う矛盾とは、〈不義の結婚〉である。彼女は、自分の選択に基いて、子供のためにかつ自分のために、父親と夫を捜すべく新聞に記事を掲載するのである。彼女は、〈家族への配慮〉から生まれてくる子供の父親との婚姻を決意している。〈家族への配慮〉とは、一体どんなものだろうか。彼女は、父母と対立して、二人には配慮を施す余地も残されていない。それは、一体誰への配慮であろうか。それは、自分自身に対する配慮以外の何物でもない。子供は、そのためのかくれみのにすぎない。ここが、原素材の農婦との極めて大きな相違である。従って彼女は、子供の不確定の父親に対して憤怒の念を禁じえないのである。

Immer noch sträubte sie sich, mit dem Menschen, der sie so hintergangen hatte, in irgend ein Verhältnis zu treten : indem sie sehr richtig schloß, daß derselbe doch, ohne alle Rettung, zum Auswurf seiner Gattung gehören müsse, und, auf welchem Platz der Welt man ihn auch denken wolle, nur aus dem zertretensten und unflätigsten Schlamm derselben, hervorgegangen sein könne. <sup>(34)</sup>

彼女は、生まれてくる子供の父親が誰であるのかまだ知らない。彼女は、それにも拘らず「これ程までに自分を欺いた人間と何らかの関係にはいること」に抵抗を示し、この人物を「最も下層にして最も汚らしい泥の中から生まれた者」と一方的に断定している。彼女は、どうして子供の父親をこのように断定できるのだろうか。それは、つまり彼女の認識があまりに一面的であるからである。彼女は、貴族の慣習を容認し一構成員として幸福を希求することによって、克服し難い矛盾に直面している。彼女は、自分の選択の意味に気付いていないために、一方的に被害者意識に陥っている。この被害者意識から、彼女は子供の父親に対して、名状し難い憤激を感じているのである。彼女は、このように父との同居生活においては現実感覚の欠如から、他方父との別居生活においては矛盾に起因する苦悩から、認識の一面性に陥っている。彼女の意識は、明らかに混乱している。彼女の抱く天使のイメージは、彼女がこの被害者意識に心を領されている限り、いつでも悪魔のイメージへと変化しうるのである。彼女は、悲劇的なことに終始この意識に支配されている。従って彼女の認識が

(34) *ibid.*, S. 127

改まらない限り, „Liebe“ の介在する余地はない。彼女は、現実の矛盾の苦悩から免れたいがために、結婚を希望し、そのためには子供をかくれみのにすることさえ、敢えて辞さないのである。彼女の母性感情は、ここでは完全に影を秘そめている。ここには原素材の農婦とはおよそ無縁な、極めてグロテスクな相が、露呈されているのである。

### III

F伯爵とO侯爵夫人の関係を最終的に決定づけるものは、二人の結婚である。彼女は、〈家族への配慮〉から結婚を決意し、彼は、貴族の慣習に従って過去の瑕瑾を贖うべく求愛を続けてきた。二人の結婚の動機は、異様な印象を与える。ここでは、二人の結婚に関して考察を進めてゆこう。

O侯爵夫人は、自己の一面的な認識から矛盾に直面して苦悶を余儀なくされているので、彼女の母性感情は、影を秘そめている。彼女は、F伯爵が子供の父親であるということが明確になった時、激しく荒れ狂い、父に対して「自分はこの男とは結婚するわけにはゆきません」<sup>(35)</sup>と絶叫し、聖水をまき散らす。彼女の彼に対する評価は、以前と全く逆になっている。

--- : gehen Sie! gehen Sie! gehen Sie! rief sie, indem sie aufstand;  
auf einen Lasterhaften war ich gefaßt, aber auf keinen ---  
Teufel!<sup>(36)</sup>

彼女は、以前彼の中に一方的に〈天使〉のみを見ていた。彼女は、今彼の中に〈悪魔〉を見ている。しかしF伯爵は、決して天使でもなければ、また悪魔でもない。彼女は、認識の一面性のために混迷に陥っている。彼女がどんなに激しく彼を憎悪しようとも、矛盾が本質的に解消されることはありえない。認識の一面性は、彼女をアポリアへ直面せしめているのである。

それでは何故彼女は、F伯爵との結婚に踏みきったのであろうか。それは、彼女の内的世界が完全に崩壊し、現実の矛盾に起因する苦悩煩悶が、彼女にとって危機となったからである。彼女は、ここに到って慣習に従わざるをえない。彼女は、そうすることによって本質的な解決のための努力を完全に放棄しているのである。F伯爵が彼女にとってたとい悪魔の如き存在であっても、彼

(35) *ibid.*, S. 141

(36) *ibid.*, S. 141

女は彼が唯生まれてくる子供の父親であるというだけで、彼との結婚に踏みきる。子供は、この場合目的のための方便にすぎない。彼女は、懐胎の矛盾から一時は慣習を超越したかのようであったけれども、実質的にはそれに対して敗北を喫している。結婚は、彼女にとって一つの方便にすぎず、„Liebe“を基幹にした、個と個の独立した相補的關係では決してないのである。ここには、極めてグロテスクな相が表出している。

F伯爵は、事の本質を理解している人間であり、彼の行動は、しかるべき出来事以来一貫している。彼は、先述したように貴族の慣習に強く支配されているため、それを超越することはありえない。彼の求愛は、彼女への愛と配慮に依拠してはいない。それは、唯過去の過誤を償うことのみを目的としている。彼は、個人としてではなく、階級の一構成員として発想している。従って彼の執拗さは、婚姻に際して消失する。彼は、「夫としての全ての権利を放棄するが、自分に要求される全ての義務を承認すべきである」<sup>(37)</sup>という婚姻契約書に、苦渋の色をあらわしながらも署名する。このような契約は、正常な婚姻の場合およそ考えられない。彼は、何故この契約を甘んじて承認したのであろうか。それは、彼が個人として発想せず、個人としての感情と権利を抑制しているからである。結婚の異様さは、これだけにとどまらない。彼は第一に、婚姻後妻のもとへは赴かず、「Mのある住居に移り住み、そこで数ヶ月暮らし、夫人のとどまっている司令官の家には一步も足を踏み入れなかった」<sup>(38)</sup>のである。このような行動は、いかなる理由に依拠するにせよ、いささか奇矯である。これは、実体の伴わない、形式にのみ固執したグロテスクな婚姻形態である。彼は、第二に「家族との何らかの接触の際に示した気品ある立派な、全く模範的な態度」<sup>(39)</sup>のために、子供の洗礼に招待される。彼は、父親としての当然の権利を放棄している。彼は、第三に「子供に二万ルーブルの供与証書を、子供の母を自分の死後全財産の継承者にする」証書<sup>(40)</sup>を提示している。彼は、ここで父親として要求される義務に唯々諾々として従っている。彼は、完全に婚姻契約書に依拠して行動している。彼の行動は、異様なまでの冷静さを具備している。

Er fing, da sein Gefühl ihm sagte, daß ihm von allen Seiten, um

(37) *ibid.*, S. 142

(38) *ibid.*, S. 143

(39) *ibid.*, S. 143

(40) *ibid.*, S. 143

der gebrechlichen Einrichtung der Welt willen, verziehen sei, seine  
Bewerbung um die Gräfin, seine Gemahlin, von neuem an-- (41)

彼は、一連の行動の後、「自分は、世間のもろい秩序のために、全ての方面から許されている」と感じている。これは、果してどういうことを意味しているだろうか。彼は、婚姻後契約書に忠実に生きてきた。そして彼はその結果、妻の家族にしばしば招かれることによって、実質的に罪を許されている。従って「世間のもろい秩序」とは、具体的には婚姻契約書のことであると理解できる。婚姻契約書は、ここに到ってその実質的効力を喪失している。従って彼は、今度は積極的に妻への求婚をはじめるのである。この婚姻に愛は、全く介在していない。それは、形式的には個人と個人がかかわりつつも、内在的には慣習に強く支配されている。F伯爵の視角から眺めても、ここには実にグロテスクな相が表出している。

このように考察する時、貴族的慣習の根強い生命力とグロテスクの諸相が、くっきりと浮き上がってくる。冒頭の戦争は、それらを白日の下に晒す重要な媒体である。戦争を契機に、安定しているかに見えたものが瓦解し、存在しないかのように見えたものが、大いなる威力をふるっている。その混乱の中で、個々の人間は翻弄され、認識の混迷に陥ってゆく。F伯爵もO侯爵夫人も、混乱の中で理性を失い、運命の犠牲に供されている。二人は、意識の有無を問わず、階級的慣習に強く支配されグロテスクな生を敢えて甘受している。そのグロテスクさは、二人の結婚において象徴的である。個人として自己の総体的感情を発露すべき場において、しかるべき発露はなされない。それでいながら儀式は儀式として完了してゆく。これこそまさしくグロテスクである。原素材がとても素朴ですがすがしい印象を与えるのに対し、当該作品が名状し難い不快感を与えるのは、このためである。グロテスクとは、畢竟名状し難い不快である。クライストは、戦争に端を発する混乱を通してこのようなグロテスクの諸相を描出した。筆者には、そのように思われてならないのである。

1982年初秋

(41) *ibid.*, S. 143